寫生しろと命ぜられた。時は三月下旬ではあるが、残雪が處々にあり、しかも霜が雪のやうに降つて居て、寒いのに閉口したが、成程早朝の山の景色は格別であつた。毎日宿に着くと、まず其日の寫生を先生に見せる。色々の批評がある。なか〳〵有益な修學旅行であつた。予は此旅行で風景畫の研究が一歩を進めたと信ずるのである。（予は其前年碓氷を越え信州路より木曽に入り木曽川を下り大垣に出でそれより郷里越前に歸りたることあり）先生も大に得る處があられたやうだ。今米國にある懸崖飛沫絹本夕陽歸樵紙本などの圖は此旅行のをりの寫生である。（此時の寫生は美術學校にある筈だが十三四年前に岡倉覺三氏が同盟辭職の時に先生の下畫類は大抵散逸したのである）歸京してから、隨行した門人共は寫生を仕上げて先生の批評を乞ふたのだが、その時予が寫生したものゝ内に、火山岩の皴法を工風したのを見られて、これは面白い。どう云ふ風にかいたのか教へろと言はれた。予は、實は是迄狩野家のやうな皴をかくと丸みが付かないから、色々と工風して見たらどうやら丸く見えるやうですと言つたら、大喜びで、其畫法をわしに呉れ。一つ描いて見るからと言つて、描かれたのが、即ちかの福壽之圖二幅對の巖の皴法である。

（岡不崩著『しのぶ草』明治四十三年十二月。日英舎）

ところで高屋肖哲は「座談会の後に」（『東京美術学校校友会月報』第三十巻第一号）に、芳崖らが明治十九年十一月に妙義山の秋景図取りのために旅行したと記している。とすると芳崖らは二度妙義山へ出かけたことになるが、しかし、それは高屋の記憶違いらしい。彼はほかに岡倉覚三が帰国直後の明治二十年十一月十日頃、本多天城と岡不崩を連れて妙義山の紅葉見物に出かけたことも記しており、これと混同しているようである。因みに高屋自身はどちらの旅行にも加わっていない。

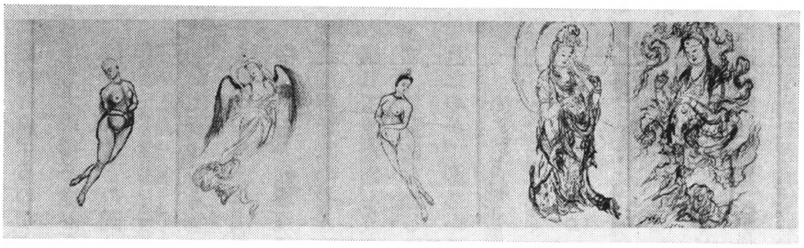
芳崖らの妙義山旅行は上記『しのぶ草』にも記されているように、修学旅行の意味をもっていたらしい。その際の写生は三巻に纏められ、本学芸術資料館に収蔵されている。標題は第一、三巻が「妙義山地取」で、第二巻は「妙義山佛界地取」となっている。孰れも主として鉛筆（一部色鉛筆使用）を用い、上毛三山や浅間山その他山脈の遠景や妙義山中の近景などを写生したもので、地名や山名、写生地点、日時、和歌なども書き込まれており、中には妙義町の白井幸次郎なる人の所蔵品（石器、曲玉、硯、古画等）の写生やメモなどもある。これらの図巻は単に芳崖筆とされているが、ほかの人の写生も多少含まれているようである。

悲母観音

日本近代絵画の名作の一つに数えられる「悲母観音」（重要文化財、本学芸術資料館蔵）は芳崖の最高傑作であり、絶筆となった作である。古くは慈母観音と呼ばれた。上述の妙義旅行から帰ると、芳崖はその下図にとり掛り、死の数日前まで小石川の事務所で制作を続けたといわれる。本学芸術資料館にはこの作品のための下図類も多く残されており、それらを見ると、芳崖が古画の観音図の図柄に基づきながらも、各種の画像、特に西洋画の天使像なども参考にして構想を練ったことが推測される。

「本校創立当初回顧座談会」（前出）に於てはこの作品が一つの話

題となり、高屋肖哲と岡不崩が周囲の質問に答えるかたちで師の制作について詳しく述べている。その中の主要な部分を抜粋する。



狩野芳崖筆　観音下図の一部

高屋　慈母觀音圖[註1]は其始め明治十四年龍池會に出品せられましたが、場中見るべき所ありて其年佛國の博覽會に日本美術として出品せられたのでありました、是は紙本で墨繪であります、恰もフエノロサ岡倉覺三両氏は歐米視察に行かれました跡で、再び慈母觀音を描き直そうと思はれて友信先生とも相談があつたのです、明治二十年の春頃より下圖にかゝられました、其以前奈良にて佛像を研究せられて、前の拙作を補ひ直されたいと思はれたのですが、爰に觀音と稚兒との面相に就てお話があります、觀音の下圖を鉛筆で描て居りました時に私は傍らに居りました、芳崖師は奈良古美術研究中の旅館角屋の娘に觀音の面相程の客貌者ある事を思ひ出して、第二觀音の下圖を作つたので、研究とを加味した天平式とも申す面相になりましたのです、夫れから稚兒の面相のことは橋本雅邦先生より聞きましたが、明治十年十月頃芳崖師が上京しまして、芝の聖り坂に住み十四五年頃愛宕下の新堀町に移轉して、荒物商を營み妻には木綿機を織らしめて、師は築地の精工社に出勤しましたが、其途上ある飴屋がありまして、其店頭に張り付たる錦繪女普賢圖の像の貌に似た娘あるを見つゝ、常に通り居られましたが、之は此の錦繪を母が朝夕見訓れたるところから像に酷似したる顔の娘が生れしならんと思ひ、養子廣崖氏の妻君は雅邦先生の娘さんですが、恰も產前に當り顔面の柔和なる婦人の錦繪を幾枚も買ひ込み、之れを座敷に張り廻して置きましたが、後ち生れ落ちたるは玉の如き男兒であつたのが、去る十四年の頃始めて慈母觀音を畫く材料となりました、其面貌は稚兒に遺りましたが二三年で亡くなりました、誠に殘念の至りでした、舊觀音の下圖の如くに水瓶を持たせては恰好が惡るいと言ふことを、帝大總長渡邊洪基氏が圖畫取調掛へ來られた時話されたのですが、恰も新下圖を畫きたるを一見され、掌を上に向けて水瓶を下方へ水を落す樣にしては如何と注意せられましたが、芳崖氏は直ぐに改良して現圖の手つきに直しましたのです、友信先生と私とが芳崖氏の傍らに居りました時、矢張り觀音下圖製作中ですが、芳崖師下繪をかきながら前畫きの面相はベソをかいて居るとて、しきりに奈良旅館の娘の面貌を思ひ出しては描いてをりました、何人が見もて(ママ)前觀音の面貌は佛面にはあらず、どなたが見てもお判りのことです、今日考へますと、明治二十年春頃より觀音の下圖にかゝりましたが、大分本圖が出來まして其年の十月頃フエノロサ岡倉兩氏

が歸朝せられました、フエノロサ氏は佛國巴里で龍池會より出品になりました古い慈母觀音の幅を買ひ求めて歸りました、直ちに傍らに懸けて一覽したのです、第二の觀音の半出來を見て大變喜ばれました、翌二十一年十一月一ぱい掛りまして仕上ました、約一ヶ年半觀音に掛りましたが其間にも大鷲とか松樹の双幅其他の物を描きました、仕上の頃は金泥金箔を澤山蒔きましたが、砂粉を蒔く時は紙帳を釣つて頻りにかち〳〵と木槌の音をさして砂粉を蒔て居りました、弟子が行くと其中へ引き入れて説教を聞かされた、其紙帳の内へ這入りますと日がさして居つた時でしたからムッとします、暫らく逃げて出た事がありました、芳崖師は是が爲め發病したのです、私が京都に明治四十一年より翌二三年にかけ滯在して居りました頃、龜岡末吉君は京都府廳の技師でをりました、其時のお話ですが芳崖の慈母觀音圖は、山口縣下のある寺に其圖に違はない圖がある、芳崖は同縣人であるから何時か見てゐたのを描いたのだと言ひました、少し私は赤面の體でした、何も赤面する事は無いよ、故人多くは皆古圖に據つて畫いたと言ふ、山口縣にある圖は支那明時代の圖で京都大德寺金岡呉道子と稱する觀音に類するが、併し芳崖は面白い處を畫いたよ、それで思ふと私は芳崖存命中途中歩きながらの話に、わしは慶應年中に藩主の命を受けて長門の國の地圖を描いことがあつたので、山坂をを下駄などで歩いても平氣だと言はれたことがありました、其時覺えてゐたのを明治十四年に畫いた其繪が佛國迄行つた次第です。之れも亦何かの參考となるかと思ひます。

岡　……面白いのは金泥を非常に澤山使つた、又殆んど西洋繪の具なので、フエノロサの持つて來たあれを使つたと云ふことで、自分にもそれが變色すると云ふことは考へなかつたらしい、西洋には色の線と云ふものがあるが日本には色の線と云ふものは無い、日本では墨で畫くが外國には色の線と云ふものがあると云ふことを始終教へられた、それで色の線で畫かれた、初めは薄墨で淡彩的の繪かと思つたがそれが段々塗り上げてさうしてあゝ云ふものが出來た、なんでも色の變色と云ふことは頭になくて夢中になつて此色、あの色とやつて居られた、今日皆樣のお話にも殘つて居るが其時は灰を引掛けると云ふ位で夢中になつてやつて居り金泥を澤山使つた、金泥を澤山取寄せてそれを大きな皿に入れて溶く、私も隨分それを溶かさせられた、狩野家では昔は隨分大仕掛で、お城の繪を畫く時は金泥なぞは非常に惜氣なく使つた、其つもりで芳崖先生はお上の御用だもの、だからどん〳〵使つた、さうしてそれを私に金箔をくづせと云ふので掌でくづしたもんですが（笑聲起る）そんなことですが、其時に前にお話した大正天皇樣が御出でになつて小父さん繪を畫いて呉れと仰せられても芳崖先生夢中で畫いて居るので、先生、殿下が御越しになりましたと云ふと、漸く氣が付いてそれから畏つて挨拶をされる、すると殿下は御發明であらせられたからいゝよ構はないから畫いておいでと仰せられました、洵に恐れ入つた話でありますが其中に殿下が小父さん繪を畫いて呉れと仰せられるので、芳崖が繪を畫いて差上げたことも度々ありました。

岡　……〔円光が雲で切れていることが美術史上意味あることであるという溝口宗文の指摘に対して〕圓光とか何とか云ふことは、此圓光を切るに就ては芳崖は餘程苦心慘澹された。私共は悲しいことに子供ではあるし深いことは知りませぬが、形より裝飾することに芳崖は非常に苦心された、初めは形だけは下繪で十分出來るが、色でやるから雲母を粉にして使つたり、斯う云ふことがあります、觀音の面相とか胴體とか、普通ですと首でも胴でも胡粉を塗る、あれは裏具があるが、これは是迄やらないことである、顔は一遍裏を塗つて直したのでありますが、初めは圓光で無いけれ共大きな一つの線があると、どうもこれは切らなければ不可ぬと云ふことで外の畫に就て能く言はれたが、芳崖の畫いた山水等はずつと行つて居る中に途中で雲で切つてあるのがよくあるが其流儀ではないかと思ふが……。

高屋　岡君のお話に繪具のことが出ましたが、あの繪具〔西洋絵具〕を試したのは觀音に非ずして仁王です。あれは悉く繪具ばかりであつて、西洋繪具を使つたのは仁王の畫であります、觀音ではないのです。

岡倉覚三の「狩野芳崖」（『国華』第二号。明治二十二年十一月二十五日）は「悲母観音」、芳崖の日本絵画史上の位置、経歴、ひととなり、およびその持論について述べたものである。冒頭次のように記しており、「悲母観音」を絶賛していたことがわかる。

法界空靈ニシテ大慈大悲ノ聲ハ有頂ニ高シ類ニ觸レテ等シク觀シ根ニ隨テ普子ク雨ル菩提ノ念ハ色心幻影ノ大河ニ滿チ救濟ノ願ハ生滅輪廻ノ火宅ニ住ス嗟嗟是觀世大士ノ眞性相ナランカ芳崖狩野翁ノ畫ヲ觀テ知ルヘキナリ一幅ノ濃淡人天相分レ上ハ則チ無量光明ノ淨界ナリ下ハ則チ五欲昏迷ノ穢土ナリ大士ノ金容端嚴ニシテ愁ニ和シテ微笑ヲ含ミ左手ニ楊柳ヲ撚シ右ニ寶瓶ヲ傾ケ瀉キ來ル無名空中一滴慈悲ノ水ハ清魂ノ人間ニ歸ルヲ送ルモノナリ赤子ノ合掌シテ仰テ菩薩ヲ見ルモノハ無知清淨ニシテ餘念ヲ抱カス亂山突兀暮雲慘澹雪冷カニ風荒ル憐ムヘシ呱々タル阿孺何クニカ墜下シ去リテ憂悲煩惱ノ長夜ニ迷ヒ那邊ノ淨池ニ向テ如意心蓮ヲ發キ再ヒ慈悲ノ海ニ遡ルヲ得ン彼ノアルノルド氏カ作リタル亞細亞之光ノ末句ハ此畫ト妙契スルトコロアリテ深ク成道ノ廣願ヲ有スルカ如シ

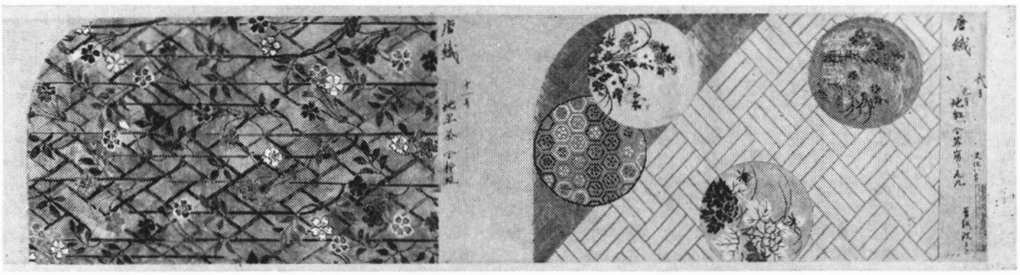
大日來乎兮露在荷　The dew is on the lotus!——rise great sun!

擧吾蓮葉兮入清波　And lift my leaf and mix me with the wave.

唵麽抳鉢訥銘唵　Om mani padme hum, the sunrise comes!

曉開滴露兮瀉光河　The dewdrop slips into the shining sea!

翁嘗テ人ニ語テ曰ク人生ノ慈悲ハ母ノ子ヲ愛スルニ若クハナシ觀音ハ理想的ノ母ナリ萬物ヲ起生發育スル大慈悲ノ精神ナリ創造化現ノ本因ナリ余此意象ヲ描カント欲スル茲ニ年アリ未タ適當ノ形相ヲ完成セスト此圖ハ翁ノ最後ノ揮毫ニ係リ長逝ニ先タ



狩野芳崖模　加州家蔵能装束模様　明治20年

ツコト纔カニ四日前ニシテ畫キ了リテ未タ款ヲ署スルニ至ラサルモノナリ蓋シ翁平生ノ心事此一幅畫中ニ留存スルモノナランカ其筆墨ノ沈着淳厚其賦色ノ明麗融渾ハ近世多ク比類ヲ見ス特ニ意匠ノ高尚秀絶ニ至テハ技道ニ進ムモノニシテ遙カニ古人ヲ凌駕セントス尋常一樣墨ヲ玩ヒ筆ヲ弄シ花天月地ニ風流三味ヲ事トスルモノト時ヲ同クシテ語ルヘカラス彼ノマイケルアンジエロノ畫キタル創造（creation）ノ圖ハ羅馬ニ遊ヒタル者ノ能ク記臆スル如ク歐洲美術ノ泰斗ト稱スヘキモノニシテ氣力豪邁ニシテ布置雄大唯見ル雲間ノ上帝片手ヲ伸シテ大地ヲ指シ倏忽一個ノ壯士ヲ現出スルヲ彼ハ則チ上帝命令念力ヲ以テ人ヲ創造スルナリ是ハ則チ觀音ノ慈悲法力ヲ以テ人ヲ發育擁護スルナリ佛家發生ノ深理ハ自ツカラ基督氏造物ノ大旨ト異ナル所アリテ其美術上ノ形相モ亦隨テ同シカラス人若シ畫裏ノ心情ヲ看破シ去ラハ豈妙悟ノ天外ヨリ落ツルナカランヤ憐ムヘシ此超凡ノ絶技ヲ抱キタル人ハ天下ノ名ヲ成ス能ハスシテ空シク黄泉ノ客トナレリ嗚呼翁ノ妙想竟ニマイケルアンジエロヲシテ美ヲ擅ニセシメサリキ

前田家蔵能衣裳模写および行幸、行啓

高屋肖哲著「座談会の後に」（前出）に次のような記述がある。

〔二十年〕四月頃河瀬秀治氏方に一同の揮毫ものを持寄りて、芳崖師は其批評を試みました。此時だけで以後は持寄會はありませんでした。河瀬氏は芳崖師を評して、一師團を引連れて歩く人だと云はれました。此の暑中休みを利用して芳崖師は弟子四人を二人づゝに分けて、毎日本郷區の前田侯爵邸に到り、能衣裳の模様を寫しに暑中の間出張しました。同家では以後三ヶ年御かゝりでも寫しきれぬと申されましたが、一夏位で中止しました。

月を忘れましたが帝國大學植物園に行幸ありて御前揮毫を仰せ付けらる。又行啓の時も毎日芳崖、友信兩師御前揮毫仰せ付けられました。

この明治二十年夏の前田侯爵家蔵能衣裳の模写は、作品が狩野芳崖筆「加州家蔵能装束模様」（五巻）として本学芸術資料館に収蔵されている。それは美術学校の意匠粉本として製作されたものであった（高屋肖哲「官立東京美術学校創立記」『校友会誌』第十九号。昭和十五年十月）。